

# 1920年代における東京府女子師範学校 附属幼稚園主任保母卜部たみの 保育記録に関する一考察

清水道代

## 1. 研究目的と問題の所在

### 1.1 研究の目的

本研究の目的は、東京府女子師範学校附属幼稚園（現東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎）の主任保母であった卜部たみの保育記録に着目し、1920年代における東京府女子師範学校附属幼稚園（以下、東京女子附幼）の実践の特徴を明らかにすることで、現在課題となっている幼小接続の具体的な実践に向けて示唆を得るものである。

### 1.2 本研究で取り上げる東京府女子師範学校附属幼稚園と時代背景

1920年代は、太田（2012,p.12）が指摘するように1899（明治32）年に「幼稚園保育及び設備規程」という国レベルで初めての幼稚園に関する規定が制定されたが、その内容が基本的に1926（大正15）年の幼稚園令に引き継がれて、戦前期の幼稚園制度が完成し、幼稚園は1920年代後半にその存在を確立した時期である。また、アメリカ進歩主義教育運動の中で発展したプロジェクト・メソッドが、日本においても大正新教育運動の実践理論として受容された注目すべき時期<sup>4)</sup>であり、当時の『幼児の教育』（幼児教育の専門誌）には、アメリカの幼稚園情報についての翻訳や視察の内容が多く掲載されている。これまでの研究でも、東京帝国大学や東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校

（しみず・みちよ 田園調布学園大学）

の実践への導入経緯や普及プロセスの特徴、問題点などが明らかにされている(遠座・橋本 2009)。また、近年の幼小接続、連続性のへの改革動向を踏まえた、幼小連携カリキュラムの歴史的研究としては、東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校、明石女子師範学校などのカリキュラムや実践が明らかになっている(遠座・橋本 2011; 橋本 2009a,2009b; 橋本 2013)。しかし、この時代、東京府女子師範学校でも、幼稚園と尋常一年を「第一部」、二・三・四年を「第二部」、五・六年を「第三部」として特色ある教育がなされていた(木村 1980,p.18)が、その具体的実践について研究されているものは殆ど見ることができない。

東京府女子師範学校は、1900(明治 33)年に竹早町にあった東京府師範学校(男子)が青山に移転し、そのあとに女子師範が設立され、小学校は移転せずに女子師範に引き継がれた。附属幼稚園ができたのは 1904(明治 37)年である。1920年代の主事を務めた田中三郎、苦瓜恵三郎、滝山義亮、木下一雄らは、幼稚園令制定に向けての活動などにも携わり、1925(大正 14)年に開催された「全国保育者代表協議会」の際に選出された理事の中に田中や苦瓜が倉橋惣三と並んで名を連ねている(『幼児の教育』1926 第 26 巻第 7・8 号, p.52)。このことから、この時代の主事たちが幼児教育の進展のために力を尽くしていたことが伺える。

苦瓜が主事を務めていた時期の 1922(大正 11)～1926(大正 15)年頃は「竹早の附属の生命の教育」と称して幼稚園と小学校の教育を小刻みに分断することなく、広い場面でのびやかに人間の成長を見守り助成しようとする「遊戯的学習」の実践と研究が熱心になされており、夜を徹する勢いの研究討論の場があったことや、機関誌を全国に向けて発送していたことなどが記録として残されている(木村 1980,p.18)。また、1925(大正 14)年には、苦瓜恵三郎により「遊戯的学習」の理論と実際についての書籍『遊戯的学習から自己学習にまで我が校の教育』が出版されており、この時代、東京府女子師範学校附属学校園では幼小接続カリキュラムについての研究が盛んに行われていたことが推察される。東京女高師、奈良女高師、明石女子師範が幼稚園と小学校の既存の制度的枠組みを維持したまま、その原理をそれぞれ採用するという研究態勢に留まる傾向があった(遠座・橋本 2011,p.13)のに対し、東京府女子師範学校では、

教育を分断することなく幼稚園と小学校が同じフィールドで研究がなされており、その点においても注目に値する。

### 1.3 ト部たみの保育記録に着目する意義と研究の経緯

ト部たみの保育記録に着目する理由の一つは、苦瓜恵三郎主事のもと、ト部は、東京女子附幼の主任保母として保育を実践するとともに東京女子附幼の保母たちの指導にも当たっていた（木村 1980,p.18）ことにある。

ト部たみは、東京女子附幼の実践について『幼児の教育』の1920年代後半の記事の中で、20回に渡り保育の記録を掲載している。記事のタイトルは表1の通りである。

表1 『幼児の教育』に掲載されたト部たみの記事(1920年代)

・「九月の幼児生活」	(1927) 第27巻第 8号 pp. 80～86
・「十月及び十一月の幼児生活」	(1927) 第27巻第 10号 pp. 13～21
・「十二月の幼児生活」	(1927) 第27巻第 11号 pp. 38～44
・「一月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 1号 pp. 23～30
・「二月及び三月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 2号 pp. 31～40
・「四月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 3号 pp. 64～70
・「五月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 4号 pp. 32～42
・「六月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 5号 pp. 30～38
・「七月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 6号 pp. 20～30
・「保育手帳から」	(1928) 第28巻第 7号 pp. 49～54
・「九月及び十月の幼児生活」	(1928) 第28巻第8-9号 pp. 69～74
・「一年の先生とお話しての感想」	(1928) 第28巻第8-9号 pp. 97～102
・「十一月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 10号 pp. 31～38
・「十二月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 11号 pp. 59～66
・「一月の幼児生活」	(1928) 第28巻第 12号 pp. 44～46
・「入学以前における幼児の数的生活（一）」	(1929) 第29巻第 1号 pp. 29～44
・「二月の幼児生活」	(1929) 第29巻第 1号 pp. 57～59
・「三月の幼児生活」	(1929) 第29巻第 2号 pp. 38～40
・「入学以前における幼児の数的生活（二）」	(1929) 第29巻第 3号 pp. 10～15
・「入学以前における幼児の数的生活（三）」	(1929) 第29巻第 4号 pp. 22～26

ト部は、保育記録を掲載することについて「九月の幼児生活」(『幼児の教育』1927 第27巻 8号 p.80)の中で「個人的なものは特に文字の上だけでは保育實際の眞の情景とか、気分などは現はしにくい事として如何かと存じましたが、何か書いてみよとのお話故是によってご指導仰ぐ事に致しました。」と述べている。文字化した記録から保育の實際がどの程度伝えられるのか、また、それがどのように受け止められるのか不安もあったようであるが、毎号に連続して

20 回以上、毎月の保育記録が掲載されていることを見ると、当時の卜部の実践に対する保育界の関心の高さが伺える。しかし、卜部の保育記録に着目した研究は筆者の知る限り見られない。

『幼児の教育』は 1901 年に刊行された『婦人と子ども』の継続誌として、幼児教育の本質を追求しようとする態度を貫いた専門雑誌であり、各時代の幼児教育の姿が著わされている。また、実践者によって記された保育記録は、その営みがどのように意味づけられていたかを知る重要な手がかりになると考える。卜部の保育記録は、卜部の主体的・具体的実践であり、現場に根ざした保育実践上の考え方や方法から示唆を得るものは大きいと考える。

卜部の保育記録に着目するもう一つの理由は、卜部が東京女子附幼で主任保姆として実践する一方で、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所（現竹早教員保育士養成所）の教員として保育者養成にも携わっていたことにある。当時、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所は、東京府女子師範学校内の一教室を間借りする形で保育者養成がなされていた<sup>2)</sup>。筆者はこれまで、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の養成教育についての研究に携わり、1914（大正 3）年生まれで、1931（昭和 6）年の卒業生にインタビューする機会に恵まれた（インタビュー時 100 歳）。その際、「卜部先生の子どもの姿を語るエピソードが学生時代の楽しい思い出として、とても印象に残っている」という話を伺うことができた。また、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の現存する史資料にある卒業生の文集の中にも卜部のことを思い出深く語っているものや、保育法などの授業を担当していたという記録<sup>3)</sup>がある。更に、1939（昭和 14）年に傳習所で初めて専任教員（保姆科主任）として松石 治<sup>4)</sup>が採用されたが、松石 は、戦前、戦後を通じて数千人に及ぶ学生を指導し、傳習所の養成教育に寄与した人物であるとともに、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の 1925（大正 14）年の卒業生でもある。つまり、当時の卜部の実践を学んだ卒業生の一人であることから、卜部の実践を知ることが東京女子附幼の保育の営みのみならず、帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の養成教育がどのような保育を目指して養成されていたかを知る手がかりにつながると考える。

東京府女子師範学校園（現東京学芸大学附属竹早小学校・幼稚園）は永きに渡り幼小連携研究に取り組んでおり、先行研究において戦後の幼小接続期の教

育観、指導観が明らかになっている。昭和30～40年代は「幼稚園教育に近づけようとする教育観、効率的な指導」、昭和50～60年は「自己教育力の育成を目指した教育観、個々の発達に即した指導」、平成元年からは、「小学校教育に幼稚園教育の要素を取り入れようとする教育観、遊び等、具体的な体験を重視した指導」（井口2015）と時代と共に変化している。このような幼小接続研究の流れは、戦前期から続くものであり、幼稚園と小学校の教育を分断することなく、広い場面で伸びやかに人間の成長を見守り助成しようとする「遊戯的学習」の実践と研究が熱心になされた1920年代の実践を分析することは、未だ模索状態にある幼小接続の在り方を展望する上でも非常に重要であると考えられる。そこで、本研究では1920年代の『幼児の教育』に掲載された卜部の保育記録から東京女子附幼の実践の特徴を捉えるとともに、卜部の教育観や指導観を明らかにすることでその実態に迫っていきたい。

## 2. 保育記録の分析

### 2.1 子どもの生活と遊びの重視

卜部は、「九月の幼児生活」（第27巻第8号）の中で、「保育日課表でもなく、保育細目でもなく、幼児がどんな生活をしてきたかという記録の一部である」とした上で、「九月の生活（主要材料）」（表2）と幼一組（年少組）の「生活記録」（第27巻第8号 pp.82～83）を掲載している。「生活記録」は表形式になっており、縦に週、横に曜日を配置しその日の子どもたちの生活する姿が書き留められている。記録の内容は「自由遊び（昨日の生活発表）園外散歩、傳通院銀杏寺付近（蟬の声を聞き蝶蜻蛉を追う）お月見の支度のこと」「自由遊び（お月見の支度に及ぶ）二の組を見て粘土にて芋ナス瓜果等を作る。展覧会（於小学校）見に行く」「園外保育、大塚東京高師校庭小石川窪町小学校へ山、池、樹木、花園、運動場、児童生徒の運動、建物、設備、家畜鳥類、その他観察」「自由遊び、夕べのお月様の話保母幼児語り合う。絵に描くもの切り紙するありすべてお土産とす。久方町通り祭の町観察禮氏神様の話、簸川神社参拝近くのS家の庭園に遊ぶ、虫類その他観察自由遊びに続いて昨日のつづき「家作り」をなす」などである。そして次のように述べている。

表2 「九月の生活（主要材料）」

<p>○夏休み中のお話 ○水遊び、色々な遊び ○花壇の手入れ ○九月生まれ誕生会 ○二十日二十日の事 ○虫干し、彼岸、月見 ○秋について（衣服、帽子傘、町の変化） ○秋として、その他（秋の田園、秋の草花、虫類渡鳥等）</p> <p style="text-align: center;">} 幼稚園生活の楽しさ</p>	幼一組
○同上	幼二組
<p>○同上 ○なおこの月は前に休暇中の教育的利用のため与えた指導案様ものについて整理すること。 ○休中の話会 ○休中の採集物、製作品等の展覧会 ○日記帳読み「朗読会」 ○また、今学期に於いては第一学期に引き続いて遊戯化としての取扱い濃く表わる</p> <p style="text-align: center;">} 等</p>	尋常一年

幼稚園及小学校低学年の教育は、子供の生活そのものを教育的に指導していく事が教育のすべてであります。・・(中略)・・

保育の五項目を分化的に時間に配當して取扱ふのではなしに、子供とともに遊んでゐる間に、所期の目的につき進めていかねばならないものと思ひます。従つて幼児の遊び即ち生活そのものが、保育の教材となるのであります。九月の生活(主要材料)(表2)とは、教育的に取扱ふ主な生活事項を凡そ配列しておいて、いはば生活暦といふべきもので、大體是によりて教育を進めていくものであり、・・(中略)・・

是は極く一般的のものでありまして、私共はいつも 幼児一人一人を教育してゐるものであります以上、各個人の要求する學習の題材が、時に臨み機に應じて殆ど豫期出来ない様なものが出てくるものである事を考へ、それに最も適當の處置方法をとる事が眞の保育即ち教育である事を忘れてはならないと存じます。それらを記録して保育の資料反省材料とする事も亦大切な事と思ひます。

幼稚園と尋常一年は、同じ生活（主要材料）を置いている。幼稚園と同様に小学校低学年においても、主要材料はその月の生活に即した大まかなテーマであり、遊びや生活そのものが教育であるという立場に立っている。保育を領域別に区切って配當するのではなく、自由遊びを重視し、遊びを通して遊びそのものが教材となる生活を営みながら柔軟に教育を進めていくカリキュラムであ

る。「一年生の先生とお話しての感想」(第28巻第8号)でも、「幼稚園では唱歌、遊戯、手技等と分化された項目について、ある型や技巧を教えるところではなく、どこまでも子どもの真當の生活全体をよりよく発展せしめてそこに項目としてまとめられた手技、唱歌、談話等が取り扱われていく。こうした幼児生活の発展としての尋常一年の教育があつてこそ真に子どもを幸福にする」とある。教師主導の知識注入主義ではなく、子どもの生活から、興味関心から出発し、一人一人の子どもの世界を大切にする保育、教育がなされていたのではないだろうか。そして、子どもの要求する学びの題材が保育者の意図を超えるものがあること、予期せぬことが出てきた時には臨機応変にその時にできうる限りの対処をするとともに記録を振り返り省察することも重要視している。「保育手帳から」(第28巻第7号)には、子ども同士の会話やつぶやき、自由遊びでのエピソードの詳細な記録があり、卜部の保育の振り返りと意味づけがなされている。主要材料は、毎回、それぞれの記事の初めに掲載されており、前の月のテーマの連続性や季節の暦、自然環境とのつながりも大切にされている。

## 2.2 心の目を開かせる「観察」の重視

また、「生活記録」(第27巻第8号 pp.82～83)からは、自由遊びを中心に据え、園外保育も多く取り入れていることが分かる。近隣小学校との交流や、お寺、神社、植物園などに出掛け、保育の場が一般家庭の庭園にまで及んでいる。自然環境や地域の人々とふれあい、お祭りなどにも参加している。子どもたちの生活の中には、園内外の散歩や観察など自然や季節を味わう機会が多くあり、「観察」という行為を通してモノと対話し自分とも対話しながら、環境と真剣に関わる経験が保障されている。それらの経験が園に帰ってからの創作活動や表現活動へとつながっている様子が次の「九月の幼児生活」(第27巻第8号)の保育日誌からも伺える。

○日。(ママ) 朝から蟬の声が盛んに聞こえる。靴を履きかえると早速思い思いの活動が始まり、自らそこに興味分団ができる。花壇或は庭に出て雑草を摘むもの室内で小さな積み木の列車に余念がないもの、クレオンを出して休中にみた景色をかくもの、大きい積み木を遊戯室に担ぎまわるもの砂場に山

やトンネルを作る者等様々である。暫くの後自然に外に集まって大部分は雑草抜に加わる。一組M子T子の手つきの上手な事。雑草の間から跳ね出すバッタ、根切虫、大きないも虫を引いていく大勢の蟻等が又一段と観察の興をそそる。砂場に出た豆の芽生えを小さな鉢に移し植えるS子さんの心づかひよ。観察は観察のために観察という方式を作るのではなく、凡て遊びの間にあらゆる機会に自然に有力に行うべきものと思ふ。そして事物に対する心の目を見開かせることが第一である。

子どもたちが自然や環境にいざなわれ、自分自身の興味関心からそれぞれの活動が始まり、真剣にモノと関わり対話しながら自分の世界を広げていく。そして、友だちや保育者とも対話しイメージを共有していくとともに、本質を見抜く目、豊かな感性を養い、生活を楽しく充実させていく姿が見られる。また、「観察」について次のようにも綴られている。

正確な経験を興へたい。兎角物を見せるとしても、只漠然と意義なしに終わるか、又は形式一扁に皮想的に、或は所謂理科教授式になり易い。子供個人々々の心の自由な伸び方を助長させ、正しい陶冶をするといふも、第一に指導者該人にある事を熱々感じ反省するのである。

観察は、子どもの遊びにとって最も重要な初めの部分であり、すべての経験や知識が入ってくる門戸であり、子どもの内的な作用によりいずれは様々な形で表現されている力となっていくものとして位置づいている。子どもたちはこのような具体的な経験を通して、包括的に、全人的に育っていく。保育者は一人一人の内面を理解し、それぞれの子どもが何に関心かあり、何に感動しどのような経験をしているのか、その内容や学びのプロセスを把握し、対話しながら適切な援助をすること、またその力量を持つ保育者でなければならないということ子ども姿からも学んでいることが伺える。「入学以前に於ける幼児の数的生活(二)」(第29巻第3号)でも「文字教育、数教育以前の教育として、あらゆる外界事象事物につき正しい観察をさせ、観念の内容を正しく且つ豊富にさせる事は大切なこととあります。」とある。「観察」という言葉は、他の月



の幼児生活の記録の中にも折に触れて書かれており、非常に大事にされていたことが分かる。

生活記録は1年半に渡り掲載されており、前半の一年間は幼一組（年少組）、後半の半年は幼二組（年長組）が掲載されている（幼一組が進級したクラス）。それぞれの内容は個々に分断されることなく、自然な流れの中で、尋常一年の教育に繋がる子どもたちの生活が連続性をもって営まれていることが見える。

### 2.3 子どもの主体的な活動の重視

保育者の共感的な援助に支えられながら、テーマ（主要材料）は子どもたちの実際生活としてどのように展開していたのだろうか。「九月の幼児生活」の保育日誌に「凡ての仕事が命ぜられた爲でなしに、お月見の支度或は誕生會等幼児の生活のプランをたてその必要から生み出され、そこに動きが起る。」とある。それぞれの子どもが自分の理解に気づき、自ら考え、新しい発見をしていく。その楽しさを共有しながらより生活を発展させていく力が育まれていくことが次の保育日誌にも記されている。

二組は数日前から各兒思ひ思ひの家づくりをしてゐたが、一組の平面的なのに対して立對的なのが一層進んで見える。今日は殆ど色々の彩色した様々な形の家が出來上った。大抵は家としての一つの製作が終われば是で仕事の完成としてお土産に持ちかへらせたものであった。一寸與えた保母の暗示は忽ち「家作り」から發展して「町作り」「都會作り。」になった。一同室の真中に机を集め、廣い地面を想定したらしい。道をかく。茶色にぬる。そこへめいめいが家をならべる。軒並みをそろえた西洋館。ここは露地。ここは大通り。「やあ電車を作ろう。」「僕は自動車。」「僕電車センロ。」「あたしは人。」「今度は木がほしいでせう」「え～先生どうやって作るの？」かくして又次々の仕事は生活活動はつきない。一同手をおいた時に乙乙と周りに集まる。Kちゃん曰く。「やあ随分世の中が發達したもんだなあ。」保母も此の言葉に思はずびっくりさせられた。おそらく眞の悦びの聲であろう。・・・(中略)一同大喜びやがてめいめで一組へ迎えにいつて發達した世の中の紹介に及ぶ。

生活から乖離した知識を伝達するのではなく、子どもが今、関心を示しているものに対して、その意味世界が一層深まるよう、保育者は、子どもたちが互いに共鳴し合いながら生活を発展させていく姿を捉え、保育者も同じ共同体の一員として子どもの経験している内容を共有している。「一寸與えた保姆の暗示」が新たな発見や経験へと繋がり、子どもたちが充実感や達成感を味わうことができているのは保育者が子どもと共にある存在であるからに他ならない。また、子どもたちの生活が単なる経験に終わるのではなく、それぞれの子どもの真の喜び、確かな生の体験へとつながるような役割を果たしていることが、子どもの生き生きとしたつぶやきや完成した自分たちの町を大喜びで伝えにく姿からも伺える。

#### 2.4 生活を豊かにしていく行事の重視

東京女子附幼の実践は、子どもの主体性を重視し、遊びを通した生活を基盤としていることが見えてきたが、日常生活とは違う行事はどのように位置づいていたのであろうか。「十二月の幼児生活」(第27巻12号)の中に「玩具祭りについて」と題し、玩具祭りを最初に行った1924(大正13)年の日誌から抜き書きしたものが掲載されている。次は保護者への手紙である。

愈々おしつまりました。・・・(中略) 昨年はお餅搗を致しましたが今年は趣をかへ、楽しかった今年の思い出を懐かしみ待遠しいお正月を楽しむその生活を一層豊かにするために、「玩具祭り」を致したいと存じます。就いては次の項お含みの上お子様と一番おなじみの深い玩具を一二點宛來る二十日(土曜日)までの間にお持たせください。

- 一 日常一番喜んで玩んであるもの、或は一番思い出深いもの。
- 一 機械の精巧とか、価格の高いものといふ選び方ではなしに、たとえ破損していても、つまらない様なものでもお子様に興味深いとか、意味のあるというもの。
- 一 此の意味でお子様自身或は他の方の製作によるものもよろし。
- 一 その玩具には姓名、買った時、及び其頃其時のお子様の状況、若しくは御感想。其他をご記入くださいます様。又、御子様自身発表出来る程度の事

は本人にさせ、一年（尋一）は説明を自身に書かせますから豫め御配慮くださいませ。・・・（中略）・・・追て當日御希望により御一緒にお遊び下さいませ方は歓迎致します。

十二月十七日 第一部（尋一、幼稚園）

一年間の成長、無事に楽しく過ごすことが出来たことへの感謝など、子どもを真ん中に置きながら家庭とともに生活をより豊かにしていく様子が伺える。日常的な生活の連続の中に節目の日として行事を位置づけ、子どもたちの生活にメリハリやアクセントを設けている。一年生も幼稚園児も同様の経験がなされるなかで、それぞれが充実感を味わえるような工夫もなされている。記録の中に、会場準備の装飾など熱心にやっていたことや、「幼児児童たちの待ちに待った玩具祭り」という記述もあり、行事を心から楽しみにしている様子が伺える。また、行事によって前後の生活がより豊かになっていく様子が、次の記録からも伺える。

寒いのお室には玩具が並び出したので、幼児は火鉢にもいかず嬉しそうに語り合っている。次から次へと玩具を持って説明にくる。今日は昨日より一層増し色々のものが飾られた。保母は幼児と個人的に玩具について話をする時はかなりに迄発表するのに一同圓形になって一人一人玩具について説明をさせてみると、殆ど断片的な一言で次々に補って初めて意が通づる位である。それが幼児として又當然の事と思ふ。従って心して母親の認めてくれた手紙の處々をよんでその幼児の説明の補ひとする處に又一層親しみが起きるのである。

Yちゃんのお話。「あのね僕ね、これお母様が松屋で買ってくださったの。」「ええ、それで足が片方取れたの。」「それで僕一緒に寝たの。」

Yのお母様のお手紙。

「前略御存じの通り乱暴者として電車も汽車も大抵の物はそばからこわしてしまひ、本等は買った時ばかり大きはぎしてもすぐあきて投げ出してしまうので、別にはと申上る物が御座いませませんが、一つ男の子にはないものを

持って遊んだ事が御座いました。それは御覧に入れた人形で、是は確か四つ  
の時松屋に買い物に参りました時、頻りに買ひたがりましたので買ってやり  
ました。その當時可愛がって寝る時は枕を並べた事も二日や三日ではござい  
ませんでした。・・(中略)然し近頃はすっかり…こんな見る影もない人形で  
すがYには思出深い物で、今のようながさつ者が一二年前にはこのお人形を  
もって一人でおとなしく遊んでいた事を御想像下さいませ。昨夜是を出しま  
したら『もっていかななくてもいいや』と恥ずかしい顔附でしたが自分でさっ  
さと紙に包んでみましたことを笑わないでやって下さいませ。」後略。

子どもの生活になくてはならない玩具を通して、一年を振り返るとともに、  
自分自身の成長を感じたり、楽しかった思い出や感動した出来事を友だちと共  
有することでお互いの存在を認め合い共同体の連帯感を深め、豊かな心が育ま  
れていくものとなっている。日本の伝統文化、四季折々の風景や命の循環など  
が、お月見やお祭り、展覧会やお誕生会などの行事として幼児生活に位置づい  
てる。また、家庭に対しても「子供の生活になくてはならぬ玩具を中心として  
それを最も教育的に扱ひ、なほ玩具に對する幼児らしい感謝の念、愛護の心持  
を養ひたいといふので御座います。」と行事のねらいを説明し、続けて「なほ  
是を機會としてその前後の生活が保育過程として十分意義があり、又家庭と協  
力して保育の内容を豊かにする處に面白味があると思ひます。」と記されている。  
家庭にも参加してもらうことで子どもたちの育ちゆく力の素晴らしさや楽  
しみを共有し、家庭生活の豊かさにもつながっていくところに行事が位置づい  
ている。Yの母親の手紙からも家庭の人も行事を心から楽しんでいる姿が伺え  
る。卜部の記録には「是だけでは如何に子供も保姆も家庭の人も楽しく何もか  
も忘れて遊んだか、いかに此の十二月の後半を意義ある保育として送ったか書  
き表はされません」とあり、保育者も保護者も子どもの育ちを喜び、繋がりが合  
いながら互いに成長していく保育が展開されていたのではないだろうか。

### 3. 総合考察

本研究では、卜部たみの保育記録に着目し、1920年代に東京府女子師範学

校で展開されていた幼稚園と尋常一年を「第一部」とする「遊戯的学習」の実践の中で、卜部によって描かれた附属幼稚園の営みがどのようなものであったのかその実態を明らかにすることを試みた。その結果、以下のような実践の特徴が見えてきた。東京女子附幼では、幼稚園も尋常一年も同様の「主要材料」として大まかなテーマを置き、保育展開の出発点を子ども自身の興味関心としていること、従って、子どもの遊び、生活そのものが保育の教材となること、また、抽象的な知識を子どもに伝達するのではなく、自由遊びを中心に据え、地域や自然との関わりも多くもち、「観察」という行為を通して探求・経験がなされ、多様な対話の生まれる場、多様な表現の生れる場の保育を保障する保育・教育であった。子どもが周囲の世界についての理解に気づき、自ら考え意味を構築し、そこに新しい発見が生まれる。そのことが本質を見抜く目、豊かな感性を養い、生活を楽しく充実させていくものとなっていた。そして、友だちや保育者とも対話し、イメージを共有しながら多様な表現が生まれていく。「家づくり」から「都会づくり」へというように、保育者は子ども一人一人の内面を理解し、今何を感じどのような経験をしているのかを記録し、把握することで、子どもの「内的な生活」（感情、情動、経験）が一層深まるよう援助している。そしてそのことが、子ども同士が繋がり合いながら共同で探求していくこと、自分の世界を更に広げていくことにもなっている。また、行事は、家庭も巻き込みながら、自分自身の成長を感じたり、楽しかった思い出や感動した出来事を友だちと共有することでお互いの存在を認め合い、豊かな心が育まれていくものとなっている。日本の伝統文化、四季折々の風景や命の循環などを通してその前後の生活をより豊かにし、子どもの生活世界の新しい発見へと繋がっている。また、学びの連続性を意識し、子どもが自己の充実をはかり、子どもらしさを充分発揮できることが最も重要な指導であり、それが小学校入学の正しい土台になるという考えが保育内容にも反映されている。

以上のことから、東京女子附幼は、子どもを中心に置き、遊び・生活を通して各個人の要求を満たしていく、共同のプロセスや学びへのアプローチであり、表現を見取っていくことに重点を置かれたゴールフリーのカリキュラムであり、非認知的スキル、社会情動的スキルが重要であると言われる現在においても、非常に示唆に富んでいると言えるのではないだろうか。卜部が保育者養

成に携わっていた、この時代の帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所の保育者養成においても同様の保育を目指していたことが推察できるといえよう。紙面の都合で記録のすべてを詳細に触れることができなかつたが、今後は、今回明らかになったことを手がかりに、尋常一年の実践との繋がりや「遊戯的学習」の成果と課題、養成教育との関係を検証することに繋げていきたい。

## 注

- (1) 橋本美保 (2008) 「アメリカ幼稚園運動における進歩主義の幼小連携カリキュラム—その理論的背景と日本に伝えられた実践情報—」『アメリカ教育学会紀要』第 19 号, pp.51-64 においても明らかにされている。
- (2) 帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所 (現竹早教員保育士養成所) は、明治 21 年から現在に至るまで保育者養成に携わり、1 万 4 千人以上の保育者を排出している。戦後の幼稚園発展期 (昭和 28 ~ 48 年頃) には東京都内の公立幼稚園に毎年 40 ~ 50 人の卒業生が就職し、専任園長の 4 割は同校の卒業生であった。しかし 130 年近い歴史と多くの実績を有しながらも、これまであまり研究の対象とされてこなかつた。1926 (大正 15) 年に、経営母体であった帝都教育会の事務所が東京府女子師範学校内に移転したことから、東京府女子師範学校内で養成教育がなされ、養成教育に携わった教員の殆どが東京府女子師範学校の教員であったことが『竹早学園百年の歴史』(1988) ,pp.69-67 に記録として残されている。
- (3) 学校法人竹早学園 (1988) 『竹早学園百年の歴史』竹早学園百年の歴史 創立百周年記念誌、学誌『竹早だより第 5 号』(1963) 創立 75 周年記念号、竹早教員養成所同窓会 (1969) 「ささぶね」創刊号、竹早教員養成所 (1994) 『わたくしと竹早の歩んできた道』株式会社博文館新社 などの中に卒業生が「思い出」として学生時代のことを語っている記録に卜部の名前が出てくる。
- (4) 松石 治は、1925 (大正 14) 年に帝都教育会附属幼稚園保姆傳習所を卒業後、大学に通いながら『指導に日案総合保育』を出版、当時の主幹から高い評価を受け、その縁で母校に勤務することになった。松石の著わした保育の手引きや教材集など具体的、実践的著書は二十冊以上に及んでいる。

## 文献

- ・遠座知恵・橋本美保（2009）「日本におけるプロジェクト・メソッドの普及－1920年代の教育雑誌記事の分析を中心に」東京学芸大学紀要総合教育科学系60号,pp.53-65
- ・遠座知恵・橋本美保（2011）「近代日本における進歩主義幼小連携カリキュラムの受容－三校の女子師範学校の研究態勢を中心に」東京学芸大学紀要総合教育科学系62号,pp.7-17
- ・橋本美保（2009a）「明石女子師範学校附属幼稚園における保育カリキュラムの開発過程－アメリカ進歩主義の幼小連携カリキュラムの影響を中心に」東京学芸大学紀要総合教育科学系60号,pp.39-51
- ・橋本美保（2009b）「1920年代明石女子師範学校附属小学校における生活単元カリキュラムの開発－近代日本における単元論の受容に関する一考察」カリキュラム研究第18号,pp.1-15
- ・橋本美保（2013）「及川平治のプロジェクト理解と明石女子師範学校附属学校園におけるその実践」東京学芸大学紀要総合教育科学系64号,pp.95-108
- ・井口眞美（2015）「幼保小接続期の保育・教育をつなぐ視点の開発（その2）－幼小連携研究の変遷と現状」実践女子大学生生活科学部紀要第52号,pp.45-53
- ・陣内靖彦（2005）『東京師範学校生活史研究』東京学芸大学出版会
- ・木村 長（1980）『竹早』東京学芸大学竹早小学校80周年記念誌,p.18
- ・文部科学省 初等中等教育局幼児教育課（2010）幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）
- ・苦瓜恵三郎（1925）『遊戯的学習から自己学習にまで我が校の教育』明治図書
- ・日本保育学会（2010）『日本幼児保育史』（第3巻）日本図書センター
- ・太田素子・浅井幸子編（2012）『保育と家庭教育の誕生1890-1930』藤原書店
- ・佐藤学（2000）『教育改革をデザインする（シリーズ教育の挑戦）』岩波書店,pp.111-113

**A Study of the Childcare Records of Tami Urabe,  
the Chief Teacher at the Kindergarten affiliated to  
the Tokyo Woman's Normal School in the 1920s**

*SHIMIZU, Michiyo*  
(Den-en Chofu University)

This paper focuses on the childcare records of Tami Urabe, who was the chief teacher at the kindergarten affiliated to the Tokyo Woman's Normal School in the 1920s. It elucidates characteristics of the practice of child care and education at that time.

It points out the following results: 1) Tami Urabe connected the last grade of the affiliated kindergarten and the first grade of the affiliated elementary school. The both grades had almost the same content and the same playful learning method; 2) Urabe utilized “play and daily life” as learning materials and regarded the interest of the children as the most important; 3) “free play” and “observation” had central positions in Urabe's practice, which could deepen and extend the children's experience.

These results suggest that the Urabe's practice of child care and education was child-centered and she tried to support the needs of each individual child's growth through play and daily life, and a goal-free curriculum that is important for her understanding children's expression and subjective world. Even today, as educators are still searching for how to connect kindergartens and elementary schools, these practices are suggestive.